

かずさの博物誌

ミユビシギ ～上総でも越冬～

文・写真／成田篤彦

2013.10.20



▲飛ぶミユビシギとハマシギの群れ＝2013年4月6日 木更津市



▲集団でえさをとるミユビシギ＝2009年12月15日 富津市

参考文献 千葉県の自然誌七巻。

memo

チドリ目シギ科 旅鳥

全長一九㌢。シギ類では珍しく後趾がなく、三本指の脚をしている。

ヨーラシアや北アメリカの北極圏で繁殖。東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。上総では旅鳥として四五月と八九月に見られる。少数だが、上総では越冬するものもいる。砂浜や砂質の干潟を好み東京湾では小櫃川河口干潟に多い。くちばしを砂浜に差し込み「カイや甲殻類などを捕える。県指定一般保護生物。

ミユビシギ

七年前の春に、友人に誘われて富津岬に野鳥を撮影しにいった。砂浜にいると十数羽のミユビシギの群れがいた。ミユビシギはニホンスナモグリ（甲殻類）を掘り出し、食べていた。ニホンスナモグリが彼らのえさにしては少し大きいのか、彼らはめったに得られないご馳走なのだろうと思った。

さて、秋風が吹くと盤洲の干潟にはシギやチドリがやってくる。その中で数が多いのはハマシギである。ハマシギは渚の近くで数百の群れで、くちばしを砂の中に差し込み、忙しくうちに動き回りゴカイなどを食べている。その群れの中に真っ白なシギが數十羽混じっていた。ハマシギと同じ大きさや姿がとても似ている。しかし、ハマシギのようにくちばしが長く曲がっておらず、短く真つすぐで

七年前の春に、友人に誘われて富津岬に野鳥を撮影しにいった。砂浜にいると十数羽のミユビシギの群れがいた。ミユビシギはニホンスナモグリ（甲殻類）を掘り出し、食べていた。ニホンスナモグリが彼らのえさにしては少し大きいのか、彼らはめったに得られないご馳走なのだろうと思った。

さて、秋風が吹くと盤洲の干潟にはシギやチドリがやってくる。その中で数が多いのはハマシギである。ハマシギは渚の近くで数百の群れで、くちばしを砂の中に差し込み、忙しくうちに動き回りゴカイなどを食べている。その群れの中に真っ白なシギが數十羽混じっていた。ハマシギと同じ大きさや姿がとても似ている。しかし、ハマシギのようにくちばしが長く曲がっておらず、短く真つすぐで

マシギと共に一斉に飛び去った。また、十月の初めに盤洲の海岸にたくさんのアオサが流れ着く。それが腐り、マットのようになる。そこに数羽のミユビシギの若鳥がやってきて、マットにくちばしを差し込む。食べているのはヨコエビ。エビはこのアオサのマットに無数に発生していて、マットをひっくり返すとノミのようには飛び出す。

砂浜に座ってカメラを構えているとえさを捕りながら、約二メートル

マシギと共に一斉に飛び去った。また、十月の初めに盤洲の海岸にたくさんのアオサが流れ着く。それが腐り、マットのようになる。そこに数羽のミユビシギの若鳥がやってきて、マットにくちばしを差し込む。食べているのはヨコエビ。エビはこのアオサのマットに無数に発生していて、マットをひっくり返すとノミのようには飛び出す。

マシギと共に一斉に飛び去った。また、十月の初めに盤洲の海岸にたくさんのアオサが流れ着く。それが腐り、マットのようになる。そこに数羽のミユビシギの若鳥がやってきて、マットにくちばしを差し込む。食べているのはヨコエビ。エビはこのアオサのマットに無数に発生していて、マットをひっくり返すとノミのようには飛び出す。



▲ヨコエビを捕るミユビシギの幼鳥
＝2008年10月7日 木更津市

の距離まで近づいてくる。シャツターカーを何度も切ったが、夕方で暗いたまに、大部分の写真はピンボケであった。

秋～冬のミユビシギはハマシギにまぎれて目立たないが、上品で美しい可愛らしい。夏羽は赤褐色で別種類のように鮮やかである。

それにしても晩秋の干潟で、雪のように白いミユビシギに出会うと秋の寒さが身にしみて来る。昔の人は秋の夕暮れの干潟でシギやチドリの群れが飛び交う姿を見て、ものさびしさを感じたというが、それも良く分かる。だが、一方では秋が深まるにつれて、たくさん渡り鳥が上総に訪れ、干潟がにぎやかなになるのも楽しみである。



▲ニホンスナモグリを食べるミユビシギの幼鳥
＝2006年4月30日 富津市



▲ミユビシギ(右)とハマシギ(左)＝2007年11月15日 富津市